
最強のフィアンセ

レイズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強のフィアンセ

【Nコード】

N0086C

【作者名】

レイズ

【あらすじ】

おれは南昂。今は高校生活も2年目に突入したばかりの16才だ。親から離れて暮らすおれの元にやってきたのは自称フィアンセを名乗る女の子?!・・・おれは知らないぞ。っていうか、おれの意思はないのか?!誰かと結ばれる?そんな予定はない!

序章（前書き）

ようやく新生活に慣れてまいりました。

新しく書くんで見てちょーらい。

序章

「おかえり」

みなさんこんにちわ。

一つたずねたいのですが、ここはおれの部屋だよな？

「・・・だれ？」

変な人が話しかけてきました。ここは無視したいくらい。

「おかえり」

「・・・」

えっと、警察、警察。

「どこに電話するの？」

「警察」

「なんでなの？」

「不審人物がいるから」

さて、110に連絡しないと。

「昂ちゃんったら警察プレイがいいの？」

「何をしゃべっている？この変態が」

ん？電話が繋がらない。

「なにをした？」

「パパに頼んで昂ちゃんの電話使えなくしたの」

「なら強制連行だな」

「いやーん。昂ちゃんのエッチ」

何を勘違いしてるんだ？！このバカ女は。

「昂ちゃん、こっちは玄関だよ？」

「お前を交番まで連れて行くための玄関、いや、すばらしきゲートだ」

勘違い娘には近づいたら危ないよな。

「いやだ、いやだ！ベットがいいのー！」

「うるさい、お前は邪魔だ！」

「昂ちゃんが外がいいなら私、我慢する・・・」

涙流しながら何を考えてる？早くこの女を外に出さなきゃ。

「やっぱり、いや！外は恥ずかしいよ」

「1つ聞くが、お前は何を考えてる？」

「それは恥ずかしくて言えないよ」

「なら、ここから出なさい！」

「答えるよ。昂ちゃんとのスキンシップ・・・初めての体験」

「なんか聞こえた気がするんだが？気のせいかな？」

「うん。気のせいだよ」

まあいい。早くおれの城を確保しなければ。

「・・・ん？」

なんかどこかで見たことがある顔なんだけど・・・。

「あー！お前は！」

「昂ちゃん、耳が痛いよ」

「あつ、悪い・・・じゃなくて、お前、何でここに居るんだ？！」

「昂ちゃんとの約束を守るために決まってるよ」

「おれは知らん！」

「えっ・・・？本当に？」

「本当に知らない」

「ぐす・・・、うえゝん」

「泣くな、泣くなよ・・・恋は相変わらず泣き虫なんだな」

でも、約束ってなんだ？おれは全くわからないぞ。こいつのお得意の妄想の中の約束か？

「昂ちゃんのバカー！ー！」

な、殴るなよ。お前はバカみたいに力がつよ・・・い・・・んだ・・・から。

「昂ちゃん！昂ちゃん！！起きてよ」

意識が途切れる寸前に聞いたのは、あいつの、泣きながらおれを求

めて叫ぶ声だった。

・・・続く

序章（後書き）

女の子の名前を募集！

ドンドン言ってください。自分の頭では考えられません・・・（苦笑）

恋愛になるの？否！婚約です！！（前書き）

お父さんって、何で元気なんだろう・・・。

恋愛になるの？否！婚約です！！

「う・ん・」

体が痛い。もう朝か。

しかし、何でおれは玄関で寝ているんだ？しかも床とキスしながら。

「もう、昂ちゃんったら」

昨日の記憶までフェードバックしてきやがった。幸せそうに寝ている奴に初めて殺意が芽生えたぞ。

「恋！起きろ！」

おれを玄関で寝かせたくせに、こいつはソファで寝てやる。

「うんにゃ？」

寝ぼけた顔でこっち向くんじゃねえよ。・・・かわいいじゃねえか。それより、

「お前は何でここで寝ている？おれは玄関でお前に殴られて気絶していたのにだ！」

「昂ちゃんを起こすのが疲れたから」。あと30分は寝かせてえ」

こいつが寝始めたらマジめんどくさくなる。早く起こして、追い出して、学校に行かなきゃ。

「恋、起きてくれたらハグしていいぞ。だから起きてくれないか？」
「起きる！」

これは全然変わってないな。昔、おれが使ってた常套手段はまだまだ健在だったようだ。よく起こしに行つてやったなあ。・・・懐かしい。

「昂ちゃん、ハグしてくれるんでしょ？」

そんな目をキラキラさせて言うなよ。

「わかった、わかった」

こいつって、こんなにいい香りしていたっけ？マジいいにおいだ。

「昂さん、どうかふつつかものですがよろしく願います」

「・・・は？」

抱きしめられんがら何を言っただ？！

「私、やっぱり昂ちゃんと結婚する！」

何ぬかしとんじゃー！！！！話しが急過ぎる！

「それは許さんぞ！！！」

もう、考えたくありません。なんで、恋の父さんが居るんだよ？！
声だけがするんだけど。

「おじさん、何でそんなところに・・・」

「お父さん？！見たくない！！」

おれの部屋の窓にベツタリくっついてる中年男、久しぶりに見た
な・・・。見たくはなかったんだが。

ちなみにおれの部屋はマンションの6階なんだけどな。・・・さす
がおじさんだ。娘のためならこんな変態行動も取れるんだから。

「ちよ、ちよっと？！やめてよ！恋ちゃん！！落ちたら痛いから」

「うん、そうだよな だからもう堕ちて」

ハートが出そうなくらいの声だったな。しかも、社会的にもハおち
るって言うてやがる。しかも必殺の鉄拳を窓に向かって殴ろうと
してるよ。ハハハ。・・・って！

「恋！！窓は割るな！」

バリリン！

ああ、おじさんもろとも殴っちゃった。

「これで邪魔者は居なくなっただね」

おれにはお前が邪魔だよ・・・。

「大丈夫ですか？」

「ふん！大丈夫に決まってるじゃないか！！恋ちゃんを残して死ぬもんか！」

1時間もしないうちに生きて返ってきたよ。すげえよな？！でも、でも！さすがの親バカです。おれは感無量ですよ。

「パパには許してもらったのに、なのに！なんで？！お父さんが来るの？！？」

恋っていつからおれの親父を「パパ」って呼ぶようになったんだろう。ってか！

本当なのかよ・・・親父。おれに安らぎをくれないのか？許しなんか本人の許可なく出すなよ！

「バカ親父がー！！！」

思わず叫びたくなるだろうが！

ピンポン、ピン、ピン、ピンポン

何だ、この呼び鈴は。壊れたのか？

「はいはい。今行きます」

開けるのは間違った選択肢だったのかもしれない。あとで、おれは思ってしまう。

「やつほー」

開けて出てきたのは、もちろん、

「あ、パパ」

「親父・・・。」

「き、貴様！」

おれの親父だった。間違えました。・・・どつかのおじさんのライバルのキモイ男だった。

「何で親父がここに来たんだ？」

「それはね、恋ちゃんと昂の婚約発表のためだよ」

「はあ？！何でそんなことになったんだよ？！」

おれは全く知らんぞ！誰が決めたんだ！！

「もちろん、僕だよ」

そりゃわかつてる・・・。

「いいから俺の質問に答えろ！」

「怖いな。わかりましたよ」

「パパ、かわいいね」

「ありがとう恋ちゃん」

おじさん、あなたのこと、誰も無関心ですよ・・・哀れ！

「さあ、話せ！」

「それはね、僕がここの変態君に賭けて勝ったからなんですよ」

「話しがわからん」

「だからね、僕と変態くんが酒飲み対決で勝ったの。それで、やっぱり勝者には何かないといけないでしょ？だから僕は会社を。この変態君は恋ちゃんを。お互いが一番欲しいものを賭けに賭けたんだよ」

ふむふむ。

「だが、何でおれと恋が結婚しなきゃいけないんだ？」

「恋ちゃんのお願いだっただから。恋ちゃんが昂と結婚したいんだって」

元凶は恋だったのか。

「なあ、おれしたく「したくないなんて言ったら、あそこに連れて帰るよ?」・・・」

だけど、

「結婚って好きなもの同士がするんだろ？だからおれが、恋を好きにならなきゃ意味ないんじゃないか？」

「確かにね」

「そういうわけで、猶予がほしい！」

「それじゃあ3年生になるまでね。それで好きにならなきゃ結婚しなくていいよ。初めから恋ちゃんと話してるし」

ム力つくしゃべり方だな。だけど、好きにならなきゃいいんだ。それで、結婚はまぬがれる！

「だけど、住む場所は恋ちゃんもここだからね」

「「はい?!」」

おじさん、まだ居たんですね。しかもハモっちゃんしましたよ。

「それはダメだ!」」

またハモっちゃんしましたよ。おじさん。

「君の恋ちゃんがしたいって言ってるんだよ? 断ったら即結婚!」

「昂ちゃん、お父さん、お願い!」

「はぁ、わかったよ」

「恋ちゃんの頼みならしょうがないよね。うんうん」

おじさんの性格って恋絡みだとかかわいいな。

「じゃあ僕等は帰るから。あとは2人でごゆっくり」

「恋ちゃんに何かしたら殺しにくるからな!」

おじさんには逆らいたくないですよ。

「じゃあ昂ちゃん、よろしくね」

「あ、ああ・・・」

こうして、婚約未満の生活?がはじまった。

続く・・・

恋愛になるの？否！婚約です！！（後書き）

次は学校に行こうよ。

恋ちゃんの暴走は止まりません！

学校って疲れます b y 昂（前書き）

更新遅れてすいません（汗）

1週間に1回のペースで書くようにがんばります

学校って疲れます by 昂

本日は晴天ナリ。昨日までのおれとは違う予感がする。
朝起きて、一番最初に思ってしまう。昨日が大変だったからな。

Replay

「恋ちゃん！いつでも我が家に帰ってきていいんだからね」

涙を流しながら言うのは、変態親父s、のおじさん。

「恋ちゃん、絶対に帰ったらダメだよ？変態なお父さんがいるんだから」

「はい！わかりました」

満面の笑みで返事してる……。おじさんが泣いてるじゃないか。

「親父、おじさん、帰ってもらえないでしょうか？学校に行きたいんだけど……」

「さつきは帰るみたいな発言したけど、帰りたくな〜い」

マジうざっ！ダメな大人のいい見本ですな。

「私もパパと居たいな〜。昂ちゃん、いいでしょ？」

上目遣いはやめなさい。おれの心臓がうるさくなるでしょうが！

「はあ〜。今日だけにしてくれよ？じゃないと母さん呼ぶぞ？」

「大丈夫！加奈子かなこさんの許可はもらって来てるんだから 今日だけだけど……。」

親父、やっぱり母さんが怖いんだな。

我が家の勢力図的に、母さん>妹>親父>犬>おれ？！ちよつと？！おれが一番下なのかよ？！

「おい貴様！お願いだから恋ちゃんを取らないでくれ〜」

「ちよつとおじさん、泣かないでくださいよ」

「だって、だって……恋ちゃん」

このようなことが昨日あった。マジうざかった。おかげで学校に行けなかったし。

今日は絶対に行くけどな。さて、我が家のお姫様を起こさなければ、

「恋、起きろ」

「うゝん・・・」

またかよ・・・。いい加減起きてくださいよ。

「恋、起きてくれたらハグしてやらないこともないぞ？」

「ホント?!」

「はい、おはよう」

「昂ちゃん、昂ちゃん、ハグプリーズ！」

「やなこった」

朝っぱらから恥ずかしいだろうが！

「うゝゝ！」

すねるなよ。

「おれは学校に行くからおとなしく留守番してろよ？」

「りょうかい」

めんどくさそうな声を出すなあ。

「じゃあ行つてきます」

「・・・いつてらっしゃい」

まだ怒ってやがる。

「昂くん、おはよう」

「お兄ちゃん、おはよう」

マンション出た瞬間に、見知らぬ人AとBが現れた。

昂のコマンド

たたかう

あいさつする

ほかくする

むしする

にげる

もちろんにげるだ。そうと決まれば全力疾走！

「お兄ちゃん、何で逃げるの？」

「それは、わからないな」

「わからずに逃げるの？」

「うん」

あいかわらず威圧感出すよな。

「嘘です。ごめんなさい。舞子まいこちゃんのプレッシャーはおれには凶器だよ」

「そうなの？それはごめんねえ」

怖い怖い。かばんで殴ろうと構えないで。

「舞子、そろそろやめなさい」

「わかったよ、・・・殴りたかったな」

最期が聞きづらかったが、殺意をもたれたのか？

「あらためて、おはよう。北島きたじま姉妹」

「「おはよう」」

「昨日はすまなかったな。朝、待っててくれたんだろ？」

「うん。お姉ちゃんなんかものすごく心配してたんだから！」

「ちよつと！舞子！！」

「桜さくら、すまなかった」

「いいよ。ただどうして休んだの？」

「それは、親父が来てたんだ」

嘘は言ってない。

「ケータイに電話したのに出なかったし」

「それはバタバタしてたんだ」

恋が窓を割ったり、おじさんがボロボロになったりで。これも嘘は言ってない。

「そっか。カゼとかじゃなくて良かった」

「心配かけてごめん」

「いいよ。それより早く学校に行こ」
「そうだな」

学校に着くと、舞子ちゃんとは校舎に入る前で放課後までお別れ。
ちなみに、桜とはまた同じクラスになったので1日中一緒なわけだ。
そういえば、あいつは来てるんだろうか？我が親友、我が悪友、ま
あ変態でいいか。

「やっぱり居たか。ぬまたでんすけ沼田伝助」

「久しぶりではないか！昂よ。昨日はなぜ休んだのだ？」

「悪い、昨日はちよつと用事でな」

「女か？お前の体からは女の匂いがするぞ！我らのく寂しい男同盟
>はどうなったのだ？！」

「そんな同盟は組んでない！」

つてかこいつの変態嗅覚はすげえな。ある意味感心だ。
なんか視線が、痛いんですけど。

「桜さん……」

そんな猛獣ですら怖がる目はやめて。

「で、女とイチャイチャしてたのか？！」

「そんな興奮して言うな！昨日は親父が家に来ただけだ。ただそれ
だけ」

「そうか。それはつまらんな」

「お前は何を期待してたんだ？」

「伝助は秘密がいつぱいなよ！」

「くたばれ！」

おれのパンチを余裕でよけやがった。腹立つな〜！

「そういえば、今日転校生が来るらしいぞ」

「本当か？」

「本当だ。昨日先生が言っていたからな。ちなみに女らしいぞ」
・・・嫌な予感。ベタな展開はお断りだぞ。

「と、言うわけだ。聞いていたか？」

「すまん、聞いてなかった」

「だから！お前の席の横になるから仲良くするなよ！同盟を忘れてはいかんからな！」

「はいはい」

まさか、な。あいつは来ないだろ。

「みんな、席につけ。今日は昨日話したように、転校生を連れて来た。男ども！かわいいからって襲うなよ」

あんた、一応教師だろうが。発言に気をつけろよ。

「じゃあ入って来てくれ」

「はあゝい」

似たような声だけど、幻聴だ！絶対に！！だから、何も見たくない！聞きたくない！！

「うおー！ー！！！！」

クラスの男がうるさい。おれは寝たフリするのみ！

「自己紹介を簡潔にしてくれ。3サイズも忘れずに」

あんたクビにしたいよ。

「はじめまして、西山^{にしやま}恋つて言います。3サイズはひみつです。

教えてほしかったりしても、教えません。だって」

嫌な予感ってかなり当たるんだよな。

刺される前に、逃げる準備しないと・・・。

「昂ちゃんのフィアンセだからです 昂ちゃん」

「名前を呼ぶな！！問題に巻き込むな！」

叫んでしまいました。

「な、なにー？！？！！」

「・・・昂くん、・・・」

やっぱり当たっただろ？

桜と男子に殺されそんな勢いじゃん！桜なんか、ごにごによと危ない発言してるし！

「南！お前は殺だ！！！！」

やばいから。

「伝助、おれは逃げるから」

「後でじっくりと痛めつけてやる」
怖いからやめて。

こうして、クラスの男子（+桜）との鬼ごっこが始まってしまった。

・・・続く

学校って疲れます b y 昂（後書き）

次回は、パート2になります。

おれは鈍感らしいです（前書き）

新たなキャラが出現！名付け親求めます。

おれは鈍感らしいです

「いたぞー！」

ちつ、見つかったか！他の奴を呼ぶ前に倒す！

「くらえ！」

おれのこんしんの一撃は、見事に命中した。

昂は、レベルが上がった。ってなんでやねん！

「いつまで逃げればいいのかな？」

思わず独り言をつぶやいてしまうよな。それもこれも、誰のせいだ？おれは被害者だろうが！

「昂ちゃん見つけた」

今回の原因め……。

「昂ちゃん、何で逃げてるの？」

「お前、わかってないのか？」

「……？全くわからないよ。教えて」

お前って、本当はねらってやってんじゃないのか？

その上目遣いと、服からの胸が見えそうな感じがおれの怒りをうばっていくじゃねえかよ。

おれも男だからね。

「昂ちゃん、教えてよ」

「自分で考えろよ」

「わかんないよ」

こいつと話してるヒマはないな。

「じゃあおれは行くから」

「嫌だ」。私も一緒に行く！

わがまま言っんじゃないありません！お母さんは許しませんよ！！

「それなら私も行くのかな？」

「?!……桜か。どうしてここに？」

「だって、一緒に行きたいから」

おれって、桜にも追いかけてるんじゃないかな？

「それに、嘘をついた制裁つてのがあるのよ！」

「嘘はついてません！桜さん、そのエモノは怖いんですけど……！」

モップでも昔剣道やってたらしい人には持たせてはダメだろう。空
気切る音が聞こえるほどすごい振りなんですけど。

「問答無用！」

「くっ！逃げるしかない！」

「昂くん、逃がさないから！」

桜がマジこええ。おれに逃げれるのか？いや、逃げればしないだろ
う。

「やあ！」

「ハッ！秘儀、白刃取り……！」

これで身動きは取れないはずだ。

「昂ちゃんかつこい……！」

照れるじゃないか。恋、気が向けばハグしてやるぞ。

「本当に……！」

「あれ？声に出てた？」

「ばつちりと聞こえたよ。ハグをちゃんとしてね」

「ば、バカ！今そんなこと言うな！」

言わんこっちゃない。モップの剣士が復活しただろうが！

でも今度は涙いっぱい目に浮かばせて、もしかして泣かしちゃった？

「昂くんの浮気者……！」

「なぜに……！」

「私が、私が！昂くんのこと大好きなのに……！」

「……！」

「私のほうが昂ちゃんのこと大好きなの……！」

「恋、お前は静かにしてる。桜、今の友達としてだよな？」

「この鈍感！いい加減に気付いてよ……！」

つてことは友達としてじゃなく、だよな？

「ごめん。今まで気付かなくて。」

「『南を発見！』」

こんな時に来るなよ。

君達がもう少し空気を読んでくれたらおれはうれしいな。

「桜、ひとまずこの話はあとで」

「『逃がすな！追え！追うんだ！』」

「『ラジャー』」

「ふう、やっと逃げれた」

もうお昼か。長い間追いかけてこしてたんだな。屋上はおれともう1人しか来れないから大丈夫だな。

それより、桜がおれのことを好きだったなんて、全く気付かなかった。

「あら、南くんじゃない」

「あつ、先輩。こんにちは」

「こんにちは。今日学校がうるさかったのは君のせいね？」

「・・・そうです。すいません」

やつぱりうるさかったんだ。全校生徒の諸君、すいませんでした！

「それで、何が原因で騒いでるの？」

「それは・・・」

こと細かく先輩に説明しなくちゃ、じゃないと先輩がおれを奴らに売りそうだし・・・。

「それは大変だね。生徒会長の権限でどうにかしてあげようか？」

「お願いしたいんですけど、その後の先輩が怖いんですけど・・・」
以前に先輩に何かをお願いしたら闘犬を見に、高知までは行ったんだよな。

その後は先輩がおれを無理矢理闘犬と戦わせるんだから、あれは怖かった。

「今回は大丈夫よ！南くんとデートしたいただけだから」

「まあそれなら・・・って、デート?!」

「了解してくれたんだ　あとは任せておいて」
「ちょ、ちよつと、先輩！それは、」
もういないじゃん！先輩とデートなんかしてみろ、クラスの奴に見
つかり、今回と同じことが起こる。そしてまた男子が暴走。
エンドレスに続くじゃないか！先輩、あなたは美人なんだから、こ
の学校のプリンスなんだから、デートだけはやめてください。お
れが死にます。

「南くん。もう教室に戻っても大丈夫だよ」
「1時間もしないうちに……。どうやったんですか？」
「うーん、内緒」
また先輩の謎が増えた。

「じゃあ明日のデートを楽しみにしておくから。ちゃんと家まで迎
えに来てね」
「先輩待ってください！」
もういないじゃん。
あいかわらずおれにNOを言わせてくれないんだから。たまには人
の言うことを聞いてほしい。
「さて、先輩がたぶんなんとかしてくれるはずだから、教室に戻る
か」

「そうだね」
お前は忍者か？
「いつから居た？」
「最初から居たよ」。昂ちゃん、気付いてなかったの？
「恋、お前より濃いキャラが居たせいでわからなかったよ」
先輩、恐るべし！
「桜ちゃんも居るよ」
大丈夫。怖くない、怖くない。
「昂くん、明日デートなんだ？楽しそうだね」。私も行きたいな」

「昂ちゃん、私も、私も」

二人そろってプレッシャーかけるなよ。

恋は鉄拳で、桜はモップで。だからおれは、

「は、はい・・・」

言うしかないじゃん！

「「やったー」」

おれはやったーって喜べんわ！

反論できないおれはヘタレか？

「もちろん。お前がヘタレだ。このことはスクープだな」

「伝助、・・・居たのか？」

「当たり前だ。僕はいつでもお前をストーキングしているからな」

「きもっ」

「キモイね」

「沼田くん、死んだら？」

三者三様の答えに伝助は？！

「鬼・・・」

泣いちゃった。今日は涙デーク？

伝助だから放っておこ。

「それより昂ちゃん、教室に戻ろうよ」

「そうだな」

おれと恋と桜が屋上から出ると、

「置いていかないでよーー！」

だって。キモイな。

そつだ、そつだ。教室に入ってビックリしたことがあるんだ。

男子が全員スキンヘッドだった。なんでか？って聞いたら、みんな

口をそろえて言ってた。

「悪魔が、悪魔が来たー！ー！」

と、言っておりました。

先輩がどうやってしたのは現段階では不明である。

・・・続く

朝起きてのドッキリ作戦？（前書き）

更新遅れてすいませんでした。今回は短めです。

プライベートが落ち着いたので、なるべく早く更新したいと思います。これからも、ご支援お願いします。

朝起きてのドッキリ作戦？

「とうとうこの日がきたのか」

今日は土曜日。普通の学生には嬉しいことかもしれないが、おれにはきてほしくなかった。

「いつそ逃げるか？」

「！！・・・逃げれない。」

「なんで体が動かない？」

首を起こして見たおれの体には、縄がしっかり巻きついてありますけど・・・。

なんでこうなってるんだ？！

「恋！恋！！」

「ふあゝゝい」

「何でそこにいるんだよ！」

恋の声が出たのはおれのベッドの横から。言うなれば、おれの部屋の床から。つつこむのが疲れてきたよ。

「夜中に起きちゃって、昂ちゃんの寝顔を一目見ようと入ったんだけど、昂ちゃんの寝顔がかわいいからそのまんま私も寝ちゃったのゝ」

「そうか。だが、この状況はなんだ！」

「昂ちゃん、もしかしてM？」

「違う！だから、お前がしたんじゃないのか？！」

この状態はけっこうつらいんだから。

「私じゃないよ。パパがやったんだって」

「なんだって？」

「この紙に書いてあるよ」

『「君はすでに僕のものさ」ってセリフを恋ちゃんに言えば、縄を解いてあげようかなあ』

ふ、ふざけんじゃねえ！！あのヒマ親父！今度会ったら太平洋に沈

めてやる！！

・・・ん？まだ続きがあるみたいだな。

『加奈子さんにいじめられたから、お前に天誅！いや、八つ当たりだ！』

b y パパ

八つ当たりすんなよ！母さん、いつそのこと埋めてください。おれからのお願いです。

「なあ、縄を解いてくれないか？」

「イヤ！昂ちゃんの縛られてる姿がもつと見たいの」
変な奴だな。

こいつの頭の9割はバカだな。おれの中で決定だ。おなじみの手を使うしかないのか？

「昂くん！なんで縛られてるの！？」

お、桜。助けに来てくれたのか？たぶん桜は、デートを見に行くために来たんだな。

「桜。縄を解いてくれ」

「えっ？何で？私が昂くんの縛られてる姿を見るのはいけないの？
ダメなの？恋ちゃんは見ているのに・・・。昂くんって白状だよな。」

・・・

「そうだよ」

白状はあんたらだろ？

もういいよ。おれが自分でなんとかするからさ・・・。

「村中将大！むらなかぢやうだい居るんだろ？出て来い」

「なんでござろうか？」

「縄を解いてくれ」

「了解致した」

村中は、おれの付き添いの忍者で、昔もよく助けてもらってたな・・・。
。こんな風に。

いい奴なんだけど、

「昂殿、拙者に絡まったでござる」

「ありがとう。そのおかげで、おれは自由だよ」

「助けてくだされ」

ドジなんだよな。

「はいはい」

村中の縄を解いている途中に嫌な視線を感じるんだよな。

「なんだよ？」

「「昂ちゃん（くん）にじゃないよ。村中さんに」」

「な、なんでござるか？」

さすがの忍者もびびるよな。この2人、怖いもん。

「なんで昂ちゃんの縄を解いたの？・・・村中さん？」

「それは、主君の命であり申したから・・・」

「恋ちゃん、しょうがないから村中さんを縛っておかない？永久に動けないように。」

ひどくないか？初登場で抹消か・・・。

村中、安らかに眠れ。

「昂殿、助けてくだされ」

「無理」

もちろん即答しないとね。

「昂殿」

再度言おう。村中よ、安らかに眠れ。

「ぎゃあーーーーー！！うあふん！！」

悲鳴なのか？それとも色っぽい声を出しているのかはつきりしろよ。
はあ、憂鬱な1日になりそうだな。

・・・続く

朝起きてのドッキリ作戦？（後書き）

今回はデート編に続く前書きみたいな感じですよ。

キャラクターの要望がありましたので、登場させてみました。皆様も、名前の希望があればどんどん言ってください。

デートに行くのも一苦労をわかってくれますか？（前書き）

長い間ほったらかしにしてしまいました。

1週間に1話は更新していくつもりなのでよろしくお願いします。

デートに行くのも一苦労をわかってくれますか？

外に出てみると、雲ひとつ見当たらない晴れだ。周りを見るとこやかな家族連れなどがたくさんいる。

「ただ、おれの心は曇り、大雨だな。原因なんてわかりきってるじゃないか……。」

両隣にいる美少女だよ。なんで付いて来るんだか。

「恋、いい加減離れてくれないか？あと、桜。怖い視線でおれを見るな」

「いやだよ」

「怖いって誰のこと？」

恋は腕にまわり付いて歩くことを困難にさせるし、桜は鋭い視線でいじめるんだからちぢこまって動けないんです。

「……もういい。だけど、東先輩には迷惑かけるなよ」

とぼけた顔を2人としてもてやがる。わかってるのかよ。

「2人とも、今日何をするのかわかってるのか？」

「デートでしょ？私との」

勘違いしてやがる。

「違う！今日は、先輩に助けてもらったお礼だ！わかったか？！」

「昂ちゃん、私がいながら浮気をもうするのね？！」

ちよっと待て。言いながら電柱をミシミシ音をさせながら潰していきな――！

「ただと言わなきゃ。……怖くないぞ、怖くない。」

「誰がだ！浮気の前に付き合っても婚約も何にもしてないだろうが――！！」

「そうですよ。私と付き合っただから」

「桜、流れてむちゃくちゃ言わないでください」

「……昂君は私がイヤなんだ……。嫌いなんだ。」

あの……、桜さん、泣きながらその服のそでから光っているナイ

フを隠していただけないでしょうか？

「2人とも！今日だけは勘弁してくれ！！」

土下座しながら頼んだけど、回りの目が痛い。

奥さん、そんな甲斐性なしのヘタレがいるわ、みたいな目を向けな
いで。

「いつか何でも言うこと聞くからさ」

「「本当?!」」

勢いがすごいな。

「本当だから今日は大人しくしといてくれ」

「桜ちゃん、これは引き下がるしかないよ」

「そうですね」

2人とも怖いぐらいの笑顔だな。しかし、ドス黒い笑顔だけど。

「じゃ、じゃあ行ってくるから」

「「いつてらっしゃい」」

ようやく待ち合わせの駅前に行ける。やっぱり休日なだけあって、
人が多いな。

駅前がよく待ち合わせをするカップルがよく利用する噴水前は非常
に多い。

この中心に天使の翼のようなものがある噴水は、おれの親父が10
年前にこの市に寄贈したらしいけど、いらないだろ。

親父の考えはよくわからん。だけど、こうやって利用されているん
だからいいんだろうな。

「南くん、おはよう」

「あつ、先輩。おはようございます」

後ろから声をかけられたから一瞬驚いたけど、まだ驚きが足らなか
ったみたいだな。

いつも制服しか見たことないけど、今日の先輩は綺麗・・・？

「つて、これカエルくんじゃないか!!」

「ナイスなツツコミだね」

カエルからひよこつと顔を出すのは我が高校の無敵の生徒会長だ。

「先輩、驚きましたよ。いきなり先輩の顔がカエルくんになったと思いますから」

「それが狙いだっただよ。ところであの2人はいないのかい？」

「2人とも大人しくさせましたよ。先輩が一応デートだって言うもんですから」

「君にしてはいい判断だったね」

と他愛無い会話をしながら駅前の噴水を歩いて、先輩が行きたがっていたバツティングセンター前に来た。

「今日は日ごろのストレスを解消しようじゃないか」

と先輩は黒く長い髪を翻しながらこちらに振り向いた。

「そうですね」

「負けたほうは、罰ゲームだからね」

「罰ゲームの内容は？」

「わたしが勝ったら、今日の昼ご飯を奢るよ。だけど、南くんが負けたら、……」

「……マジですか？」

「大マジだよ」

あまり気が向かないけど、そんなことは気にしないでいよう。

これは負けられない戦いになってしまった。

伝助の不幸。おれの憂鬱

バッティングセンターでの勝負はものの見事に負けました。20球のうちにどれだけ打てるかを競った結果は、先輩が19球、おれが10球。

「ストレス発散できたね」

というのは19球のうち、18球ホームランを出した先輩。

「そうですね。あの、あれやらなきゃいけないですか？」

「もちろん」

やりたくねえー！

「やりたくなくてもやるんだよ？」

「顔にでてました？」

「すごくでてるよ」

そりやそうでしょ！あれをやりたいと思うのがどこにいるっていうんだよ？！……いたな。変態という名のクラスメートが。

あれを変態がやった時点で先輩に三途の川送りになると思うが。

「それじゃおなかも空いたし、ご飯を食べに行こうか」

「……そうですね」

「ふて腐れない、ふて腐れない。明日の学校で楽しみにしとくから」

「楽しみにしないでください」

真剣にお願いします。全校生徒を、学校を敵にまわしたくないんで。

「じゃあご飯は近場にあるファミレスでいいかな？」

「はい……」

本当に憂鬱だ。明日、学校休校にならないかな？なるわけないよな。

「いらつしやいませ。何名様ですか？」

「……2人です」

バツティングセンターから15分ほど歩いたところにあるファミレスに來たそうそう厄介事が増えた。

なんで？なんで変態が店員なんだよ？！

「昂よ、赤い糸ってあるもんだな」

「もし！お前との間にそんなものがあるというなら即刻、断ち切ってやる」

「照れるなよ」

嫌がつているのが本当にわからないのか？変態は変態KYに進化してやがる。

「先輩、この店はやめませんか？」

「昂！なんで生徒会長と一緒にいるんだ？！」

「別にいいんじゃない」

「先輩が言うなら別にいいですが」

「おい！無視か？！無視するのか？！！」
うるさい変態だな。

「おい変態。これから語尾にドMですからってつけて話したら会話してやるっ」

「なんでそんな上から目線？！」

「今日から1週間ずつとしてろよ？」

「拒否権なし？！そんなむちゃくちゃな！」

「それができたらお前の好きなアレをやるっ」

「やらせていただきます。ドMですから」

「アレってなんなの？」

「秘密です」

アレがからむと扱いやすいんだから。単純でバカで変態なんだから扱いやすいの当たり前か。

「じゃあ席に案内してくれないかな？」

ちよつと先輩が不機嫌なんですけど。今まで会話に入れてなかったからか？

「わかりました。ドMですから」

気持ち悪いやつだな。

「先輩、こんな店員じゃなく違う店員に対応してもらいたいんですね」

「そうだね」

「ちよつと待て！僕は無視か！無視がいいと思っているのか？！・・・ドMですから」

と、騒いでるうちに変態は店長らしき人物に奥に連れて行かれた。たまに、奥の方から「ドMですから！」と聞こえるのは完全に無視にしよう。

「先輩、なんにします？」

「わたしはハンバーグとパスタとこれとこれe t c・・・にするよ」

「食べれるんですか？」

先輩が常人じゃ考えれない量を、吐き気がするぐらいの量だぞ。軽く8人前くらいは間違いなく頼もうとしてる。

「これくらいは普通に食べられるよ。お金なら心配ないから。だって、あの変態君にお金は払わすつもりだから」

食べる量と、お金の面で。言葉が出ないな・・・。伝助、いや変態よ。お前のバイト代はすぐになくなる。財布はもう時期冬を迎えるだろうよ。

「じゃあ頼みましょうか？」

「そうだね」

「ドMですからー！！！！！！」

なんか聞こえたな。気にしないでいよう。

「今日は付き合ってくれてありがとう」

「いえ、おれも楽しかったですから。こちらこそありがとうございます。東先輩」

「下の名前で今日くらいは呼んで欲しかったな」

先輩の名前ってなんだっけ？たしか、陽菜だったかな？

「先輩の名前って陽菜であってましたか？」

「そうだよ」

「じゃあ陽菜先輩。今日はありがとうございました」

「それでよしとするか」

「？なにがですか？」

「こつちの話だから気にしないで」

よくわからんな。

「じゃあ南くん、また明日学校でね」

「はい。陽菜先輩」

先輩は駅に向かって歩いて行きながらこつちを振り向き、何度も手を振ってた。

余談だが、先輩が食べた金額はちゃんと伝助に払わせた。諭吉さんが2人ほど飛んでった金額はおれが払うことにならなくて良かった。さらに余談だが、帰ってみると恋がニヤケながらおれのベットでゴロゴロ転がっていた。

何をニヤケているのか知りたくない。絶対に！・・・聞いたら最後だと思っからな。

トラブルはいつも周りから〜前編〜

朝、それは人によつては新鮮な気持ちになれるものであったり、憂鬱なものである。今のおれの心境は間違いなく後者だけど。ついでに、おれの場合は問題も発生するわけだからな。

1番目の問題は、朝起きるとベットの中には不法侵入者が1名寝転んでいること。おれは確か、寝る前に部屋の鍵を閉めたはずだ。だが、そいつはおれのベットで気持ち良さそうに寝ている。時折、よだれを垂らしているが。

「おい、恋。起きろよ」

「昂ちゃん、……そんなことダメだよ………ジュルリ」

どんな夢を見てやがるんだ？よだれを垂らして、おれが関係する。わかるはずない！この2つのキーワードでわかるほどおれは頭がよくないぞ！

「恋！遅刻するぞ」

こいつ、遅刻したいのか？

「恋、今日はおれも知らないぞ。いいな？」

完全に爆睡モードになってやがる。

恋が起きたのは、その出来事からちょうど、26分後。

起きておれに怒ってきやがった。

「なんで起こしてくれないの？！」

ご近所さんに聞こえるほどの声でうるさーい！

「起こしたのに起きないお前が悪い」

「ハグとかしてくれたらすぐに起きるのに〜！」

「しょっちゅうハグとかできるか！！」

おれも大きな声になっちまった。

「昂ちゃんのイジワル〜！」

すねやがった。まあ、そう言いながらも準備してるからいいかな。

「恋、準備できたら行くぞ」

「はあ~~~~い」

完全にすねたな。

「今日は恋の好きなもの作ってやるから機嫌なおせよ」

「それだけじゃヤダ〜」

駄々っ子に進化してないですか？

「じゃあ何をしてほしいんだ？」

「ハグ!!」

「はいはい」

おれって甘いよな……。ハグしてから2分後に家を出れた。

「「おはよう」」

「ああ、おはよう」

「おはよ〜」

「恋ちゃん朝から嬉しそうですね」

「うん 桜ちゃんわかる？」

「わかりますよ」

「恋お姉ちゃん何があつたの??」

舞ちゃん、それを聞いたらダメだ!!

「お兄ちゃん? クラウチングスタートのポーズ決めてどうしたの?」

「舞ちゃん。聞かないでくれ……。大人の事情って奴だから」

「今日ね、昂ちゃんにハグしてもらったの」

「「えっ?!」」

やばっ。早くここから逃げないと。

ガシッ

「どこ行くんですか? 昂君」

「そうだよ。お兄ちゃんそんなに焦ってどこ行くの?」

やけに2人が怖いのはおれだけじゃないよな? だって野良犬なんかもさっきまでゴミを漁ってたのに、今は遠い彼方にいるぐらいだ。

野生の本能で逃げたんだろうな。

「き、今日は早く学校に行きたいな〜っと思ひまして」

「「なんでかな?？」」

2人が怖いからだなんて言えるかよ?!言える奴がいたら出て来い!!

「2人とも怖いよ〜」

ここにいらっしやいましたね。

北島姉妹が恋のほうを睨んで、恋が泣きそうだし。

「恋、学校まで逃げるぞ!」

「わ、わかったよ〜!」

「「待てー!ー!ー!」」

これが2番目の問題。

不用意な発言は気をつけさせないと。

とにかくダツシュで、学校の校門前まで着いた。

おれが苦しいのに、隣の恋はケロッとしてやがる。おれの体力は人並みにはあるはずなんだけどな。

「疲れたね〜」

お前が言っても説得力に欠ける。

「「待てー!ー!」」

「・・・はあ、はあ・・・恋、教室に行こう。今すぐ行こう」
「・・・そうだね」

北島姉妹の追撃は教室に入った後も続いたよ。結果?桜と舞ちゃんにボコボコにされましたよ。教室にいた男子からの攻撃もなかったよな、あったよな。

遅刻はしなかったけど、痛いよ・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0086c/>

最強のフィアンセ

2010年10月10日18時56分発行